

福生市の植物調査中間報告

多摩川沿域の樹木、竹類について

まえがき

自然人としての反省

わたしたち人間は、過去をふりかえりながら、先人の足跡の中から自からの歴史的あゆみを見いだしてきた。その中から、多くの歴史的遺産を承けつぎ、その文化的評価に応じて保存、保護の方策を執り、多くの人々の関心を高めることにつとめ、文化の向上に一つの役割を果たしてきた。過去の歴史の具象的なあかしとして、人間の「生きざま」をよりよく理解するために大きい助けとなった。

しかし、その理解の中には、よりひろく深い洞察と根源的な認識とを欠いた部分があった。それは人間の「生きざま」の中に介在する反自然の指向について、何の自覚もなしに看過し、人類だけが特別に許された存在であると誤認し、勝手な「生きざま」を反省もなしに続けてきた。人類それ自体が自然の所産であり、その部分でしかないことへの畏れを忘れた。人間を中心に据えた自然感が、いつしか自然疎外という行動様式を生み、こうした思考パターンが、人間を非自然の生物と化そうとしている。このとき、大自然のサイクルに乱れが生じてきた。過去の行動様式をこのまま続ければ、人間の生命の基盤、命を保障する自然さえ失ないかねない。この自覚と反省とが、自然保護思想を生み、日常化した運動として展開されているのが今日の状況である。

乗離からの脱出

人間は自然とのかかわり合いの中で、どのように生きてきたのか、時の流れを経て人間の「生きざま」が歴史として登場してくる。そして、それは自然の懷を離れて生活はありえなかったことを示している。しかし、人間は自己の生活圏を次第に拡大して行くことに未来を託し、自然との乗離を内に孕みながら、時の流れに乗り続けてきた。人間は、こうして一人歩きをはじめ、徐々に知的エネルギーを蓄えて、遂に自然の復元力を超える力を手にした。それが、行動力となって機能するに至ったとき、無限の存在を誇っていた自然は、有限に転化した。人間の「生きざま」の内に潜在していた反自然的指向は、突如として顕在化し、自然破壊のエネルギーとして働きだした。もう、自然は無限ではありえなくなった。

このことは、極めて重大なことである。それは、自然が質的に変化したことを意味し、人間の側の自然に対する姿勢を、緊急に問いなおさなければならない時点に立たされたからである。自然のサイクルの維持が困難になったわけである。このまま、これを放置しておけば、自然は荒れ果て、衰亡の一途をたどるばかりか、人間自身の命運もまた絶たれることになる。このような状況からの脱出を、

真面目に考えざるをえない段階に到達した。

自然との調和

自然と人間の命とは深いかわり合いを持ち、深層で全く一つのものとして結びついている。こうした摂理の中で、「かけがえのない命」を大切に、人類が生き続けることを願うならば、この「かけがえのない自然」を同じ重さで護りつづけなければならない。人間は大自然の共同体の一員であり、特別の存在ではなかった。「生きる」とは、自然との調和に他ならない。自然を無視して生きる人類には、未来はない。崩潰した自然の中に立って「生活」を語ることはできない。

社会的目標の根底には、「命を守る」ことが据えられなければならない。人間自身の命運を保障し崇高な使命を達成できるかどうかは、人間それ自身の姿勢に託された。そして、超自然の破壊的エネルギーを手にした人類にとって、自然の保護者として登場する以外に生きる道はなくなった。自然との調和を果して命運を保つか、破壊によって滅亡を選ぶか、生殺与奪の権を自らの手中に納めた人間の、正念場であり、選択の時である。

自然と今日的課題

この、今日の状況のもとで、市内に存在する自然を多面的な側面から明らかにし、文化行政の中に組み入れようとする試みは、当然のこととはいえ、時宜を得た計画といえよう。今回の植物調査も、この考え方の延長線上に位置づけられて行われたものである。

近時、都市化の著るしく促進された福生市では、野生する植物の「みどり」は残り少なくなった。この残り少ない貴重な自然を、先人の遺産として見なおし、認識を新たにして護り育てて行くことが必要である。「みどり」の保護は、ただ単に、視覚的、心理的な効果というロマンを超えたところにある。即ち、生活環境を支える主役として登場してきた。

自然を無限と考え、「みどり」を風物詩の叙景的存在とする感覚の中からは、真に豊かな市民生活の確立は保障されない。それほどまでに、「みどり」の保護が「命を守る」ことにつながってきた。環境整備にあたって、自然との調和が強く求められている所以も、命との深いかわり合いがあるからである。この命題を避けて通るかぎり、環境の整備は、環境の破壊と同列に陥ることになる。真摯な努力を重ね、これに立ち向って未来への展望を切り拓くことを祈りたい。